

## 企画展の保存記録 — 展示のかたちと記憶をデジタルで繋ぐ —

たぐち きみのり  
田口 公則(学芸員)

2025年2～5月に開催した2024年度企画展「すな—ふしぎをみつけよう—」は、身近な砂に着目し、粒だからその特性を体験展示を交えて紹介する、科学的な要素も取り入れた展示でした。私も展示メンバーとして、展示の全体構成やパネルデザイン制作等に関わりました。企画展は会期が終われば、その空間は消えてしまいます。せっかく開催した展示を、どのように未来に残せるでしょうか。本稿では、特別なシステムがなくても「いまできること」を探ってみようと思います。



図1. 企画展「すな」の展示室3Dモデル(ScaniverseによるLiDARスキャンで構築・加工)。

### 情報発信が、実は記録になる

「すな展ってどんな展示だったっけ？」と後から振り返る際、まず役立つのはウェブサイトの企画展ページです。当館の企画展では図録を出版していないため、広報用に作成したウェブページが、結果的に展示の概要を知るための「副次的なアーカイブ」として機能しています。関連イベント情報の掲載もあり、展示だけでなく博物館活動の記録としても価値があります。ただし、ウェブサイトだけでは、展示物の配置や展示室の雰囲気といった空間情報までは分かりません。これらを補うには、次に紹介する3D記録が有用です。とはいえ、ウェブでの情報発信そのものが、後から検索できる記録として機能するという視点がアーカイブの第一歩として重要です。

### 空間を記録するなら3Dモデル

最近ではスマートフォンやタブレットで、手軽に3Dモデルを作成・構築できるようになりました。私もiPad Proと3DスキャンアプリScaniverse(Niantic社)を用い、展示室等を簡易的に3Dで記録しています。わずか数分の作業で、展示室空間を3Dモデルに残すことができます(図1)。

より正確な3Dモデルが必要な場合は、フォトグラメトリという手法も有効です。これは対象物を様々な角度から撮影した多数の写真をもとに3Dモデルを構築する技術です。撮影時は、隣り合う写真が7～8割ほど重なるように、たく

さんの視点から撮るのがコツです。多数の撮影が大変なら、展示室内を歩きながら動画でまんべんなく撮影し、その動画から静止画を切り出して利用するという方法も可能です。

このように画像データを多く残すことで、将来より高性能なソフトが登場したときに、より質の高い3Dモデルを構築できるかもしれません。展示室3Dモデルはバーチャル展示室として公開できるほか、モデル内に解説リンクを設ける等の活用も可能です。

### 展示制作過程もアーカイブに

展示製作用のパソコンには、パネルやラベルのデータ、構想段階の展示室図面、使用する候補画像等、関連ファイルがたくさん保存されています。これらは単なる制作素材に留まらず、展示完成までの過程を示す「アーカイブ資料」とも言えます。

本格的には専用のデータベースでの管理が理想ですが、まずは共有ハードディスク等に、内容が分かるようにファイルを整理・保存するだけでも十分です。例えば、ファイル名やフォルダ名に「展示名\_コーナー名\_内容\_日付」といった命名ルールを設ければ、「簡易メタデータ」として機能し、後から探しやすくなります。重要なことは完璧さよりも、まず情報をドキュメンテーションとして残すことです。元データがあれば、次の展示で

参考や再利用もでき、デザインを一から考える手間が省けます。Adobe Illustrator等で作成されたレイアウト案等には、デザインの試行錯誤の痕跡から、作り手の意図などを読み取れる場合もあります。

また、展示に関連してスマートフォンで撮影した何気ないスナップ写真や、制作中のメモや手書き図面等も、後の検討や継承に役立つ記録となります。このような記録には、人の想いや思考の断片までも映し出して記録できる可能性があるのです。

### 未来へ残す企画展のかたち

ここまで、ウェブサイトの情報、3Dモデル、制作ファイル、写真等、様々な角度から企画展の記録について見てきました。これらが将来、デジタル技術によって立体的かつ相互にリンクされ、ドキュメンテーションがなされれば、時間や場所を超えて展示を再体験できるようなことが実現するかもしれません。

この情報構造化の考え方は、私の専門である地質調査にも通じます。フィールド現場の観察記録を体系的に残し標本と関連づけることで、博物館資料としての価値が高まるからです。小さな記録の積み重ねが未来の活動に繋がるものと信じています。

なお、本報告はJSPS科研費 JP24 K04395、JP22K01025の助成を受けたものです。